

人生二毛作

その265

さかいで朗読倶楽部「みどりの風」代表/坂出市

さわ た しば き
 沢田 茂樹さん(79)

端役ながら舞台上に立ったことのある元公立高校の教師がリタイアの後、今度はその舞台を「朗読」に代え、「主役」の座を務めている。沢田茂樹さんは、大阪の

公立高校で7年間、教鞭を執ったあと、郷里(坂出市)に帰り、県立高校の教師となり、観音寺市と高松市内の高校で校長を務め、定年退職。その後、私立高校の校長、看護専門学校校長などを歴任、2007年に教職を退いた。

「子供のころから、とにかく声を出すのが好き。時には本も声を出して読んでいた」と沢田さん。大阪時代は演劇を志したこともあり、作家の筒井康隆さん、後に劇団R&C代表となった八木亮三さんが所属していた青年新劇団「青猫座」に入り、舞台上に立った。1960年には、ポール・ク

「朗読の出前は、要請があれば小学校などへも出向

ローレルの「マリアのお告げ」を上演、大阪市民芸術祭賞を受賞した。

5年前、朗読を出前する「さかいで朗読倶楽部『みどりの風』」を立ち上げた。

「朗読を勉強するため、高松朗読会に入会したり、NHKの通信教育で朗読講座を受講した。通信講座ではテープ審査があり、テープを送ったら、添削指導の担当講師から、声、語調、間

とも大変よろしいとの、お褒めの言葉をいただいた。少しは舞台経験が役立ったのかな、と自信になりました」。

くが、定期的には月2回、地元の保育園を3カ所巡回している。最も苦勞するの

が一つ増えた。7月にオーブンしたばかりの地元の老人ホームで、入所者に朗読を聞かせた。「私の朗読は慰問だとは思っていない。それぞれが『何か』を感じて、心に火をともしてくれたらいい。朗読は自分が燃えないと、聞いてくれる人の心を燃やすことはできませんから」。

若々しくて、ダンディー。ソフトな語り口は、朗読の「舞台」での主役が映えそうである。

シニア編集室・栗生武志

心に感じるもの届けたい 経験生かし「出前朗読」

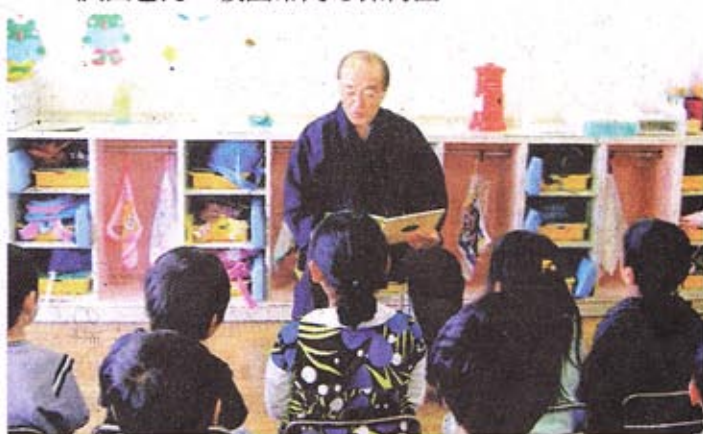


「朗読は『75歳の手習い』で始めたんです」と語る沢田茂樹さん(四国新聞社)

が作品運び。長すぎると園児は飽きてしまう。最初のころは、むずかっていた園児たちも『面白い、もっと読んで』と催促するようになった。園児が成長したのか、自分の朗読が腕を上げたのか、手応えを感じているんです。

沢田さんは昨年と今年、坂出市内の県立高校の「朗読の時間」名作に触れる」に招かれた。昨年は井上ひさしの『ナイン』、今年には川端康成の掌小説『雨傘』と立松和平の『海のいのち』を朗読した。「後日、生徒

作務衣姿で園児たちに本の読み聞かせをする沢田さん(坂出市内の保育園)



たちの感想文を読ませたい。とかく若者は活字離れしているといわれるが、高校生なりにちゃんと理解してくれていた。うれしかったですね」。

今月から沢田さんの活動の舞台

が一つ増えた。7月にオーブンしたばかりの地元の老人ホームで、入所者に朗読を聞かせた。「私の朗読は慰問だとは思っていない。それぞれが『何か』を感じて、心に火をともしてくれたらいい。朗読は自分が燃えないと、聞いてくれる人の心を燃やすことはできませんから」。

若々しくて、ダンディー。ソフトな語り口は、朗読の「舞台」での主役が映えそうである。

シニア編集室・栗生武志

月曜
シニア